

中学校におけるよりよい人間関係づくりのためのプログラムの開発と実践

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
柿内 英紀

実習責任教員 阿形 恒秀
実習指導教員 小坂 浩嗣

キーワード: 人間関係形成力、自己他者理解力、コミュニケーション能力、ルール、リレーション

I 課題とテーマの意味

1、今日的課題

今日、少子化、核家族化、情報化等が急激に進み、生徒を取り巻く環境は大きく変化している。そのような中で、家庭や地域社会において、人の関わり方を身に付ける機会や直接の体験を通して学ぶ生活体験、自然体験の機会が減少している。このことは、集団の中で人間関係をうまく築くことができない生徒を生み、いじめや不登校等さまざまな問題を引き起こす一因となっていると言われている。さらに、集団内の人間関係の希薄さや未熟さによる自己肯定感やコミュニケーション能力の低下が指摘されている。

平成 20 年に改訂された中学校の学習指導要領では、特別活動編の目標に「人間関係」が加えられた。目標に「人間関係」が加えられたのは、生徒が自分に自信を持てず、そのため好ましい人間関係が築けず、更に、社会性の育成が不十分である状況を踏まえ、望ましい集団生活を通して、生徒がよりよい人間関係を築くことを目指したからである。また、第 4 章「指導計画の作成と内容の取扱い」の第 2 節の 1「学級活動、生徒会活動の取扱い」には、学級活動において「人間関係を形成する力を養う活動などを充実するよう工夫すること」と示されている。

そうした中で、生徒が一日の大半を過ごす

学校、学年、学級は、生徒の自己肯定感を高め、集団の中で社会性を育成し人間関係の築き方を学ばせる場として、その果たす役割がますます重要になってきている。

2、実習校の課題と目的

実習校は県西部に位置する全校生徒 324 名（1 年生 4 学級・2 年生 3 学級・3 年生 4 学級・特別支援学級 2 学級）の中規模校である。

実習校の課題として、学校は落ち着いてきてはいるものの不登校問題（別室登校 6 名、ふれあい学級に通級 2 名、完全不登校 9 名）がある。不登校生徒の実態の一つとして「人間関係づくりが苦手」が挙げられる。したがって不登校を生まない未然防止を講じる上でも、「集団作りを通じた人間関係形成力の育成」が必要であると考えた。

また、教職員への聞き取りから、学級づくりを進める上で困難に感じていることは、「生徒同士の人間関係が築けない」「秩序やルールが守れない」などが挙げられた。

さらに、生徒間の人間関係づくりを進める上で困難に感じていることは「他者とうまく関わらずに感情的になる生徒」への対応であることが分かった。そこで、よりよい人間関係づくりを促進するプログラムを作成し、計画的に人間関係づくりを進めていく必要を感じ、本実践研究に取り組むことにした。

3、「よりよい人間関係」の意味と「人間関係形成力」と「集団作り」の関係性

文部科学省(2008)「中学校学習指導要領解説特別活動編」においては、望ましい人間関係について、「豊かで充実した学級生活づくりのために、生徒一人一人が自他の個性を尊重するとともに、集団の一員としてそれぞれが役割を果たし、互いに尊重しよさを認め発揮し合えるような開かれた人間関係である」と示されている。そこで本実践研究では、「よりよい人間関係」について、「自他のよさを理解し、様々な人とコミュニケーションを図り、互いに協力し認め合える関係」であると考えた。そうしたよりよい人間関係を築くためには、他者との関わりの基盤となる自己他者理解力と、他者と円滑な人間関係を築くためのコミュニケーション能力の二つの力が必要だと考え、これらを合わせて、「人間関係形成力」と位置付けた。

次に、人間関係形成力と集団づくりの関連性について述べる。生徒の人間関係形成力は他者とのかかわりの中で育成されていくと考える。そのため、生徒が所属する学級集団がどのような状況であるかということは、とても重要な要因になる。所属する学級集団において、学習規律やルールが守られ、生徒それぞれの人格が尊重される中で生徒同士が互いに関わり合い、さらに互いをより高め合っていくことで、人間関係形成力が高まると考える。

河村茂雄(2007)は、「よりよい学級集団にするためには、ルールとリレーションの二つの要素が学級内に同時に確立していることである。」と述べている。また、ルールについて、「生徒同士の対人関係を建設的に促進

し、互いが傷つくことなく、より対人関係を広め深めることができるための行動の仕方のシステムである。」と述べている。

また、岡田弘(2014)は、リレーションを「あたたかな人間関係」とし、「自他を理解し、認める関係ができればそれは肯定になる。肯定的に認め合う関係が、あたたかな人間関係づくりになる。」と述べている。

これらのことから、本実践研究において、生徒の人間関係形成力を構成する自己他者理解力とコミュニケーション能力を育成することは、よりよい学級集団のリレーションとルールの形成につながり、さらに、学級集団のルールとリレーションの形成を目指す指導は、自己他者理解力とコミュニケーション能力の育成につながると考えた。

II 実践の計画と取組

学級集団づくりの年間配置時期について、教職員への聞き取りを行ったところ、4月が出会い学級づくりの時期、5～7月が学校生活に慣れてくる時期、9～12月が、学級の仲を深める時期、1～3月が学級づくりの仕上げの時期、と考えていることが明らかになった。そこで、それらを「出会い」、「気づき」、「協力」、「認め合い」の四つの時期として設定した。

次に、よりよい人間関係づくりを進めることを目的として、朝の会・帰りの会での取組、宿泊研修での取組、グループエンカウンターを取組を立案し、実践を行った。

具体的には、朝の会で「1分間スピーチ」帰りの会で「今日のMVP」を取り入れた。育てるスキルを「話す」「聞く」「自己理解」「他者理解」とし、朝の会では、互いを認め

合うこと、帰りの会では友だちを肯定的に捉えることを活動のねらいとした。さらに、これらを取り入れることで人間関係形成力（自他の良さを理解し、自己の個性を發揮しながら、様々な人とコミュニケーションを図り、協力し認め合って生活していく能力）を身に付けさせ、よりよい学級集団を作ることができると考え、実践を行った。

宿泊研修の取組は4月に行った。アクティビティとして「スゴロクトーキング」「☆いくつ」「仲間づくりハッピーレシピ」を取り入れた。この取組で育てるスキルを、「話す」「聞く」「自己理解」「他者理解」とし、活動のねらいを、「様々な体験を通して人間関係形成力を身に付けさせること」とし実践を行った。

グループエンカウターの取組においては、5月に、アクティビティ「背中合わせと向かい合わせ」を実施した。ここでは、育てるスキルを「話す」「聞く」とし、活動のねらいを、「話す聞くときの位置関係が情報の伝達にどのように影響するかを体験的に学ぶこと」とした。

6月には、アクティビティ「オダーニ君を探せ」を実施した。ここでは、育てるスキルを「自己理解」「他者理解」とし、活動のねらいを、「話し合いの中で、必要な情報を提供し、積極的に課題解決に向けて貢献できる力を付けること」とした。

7月には、アクティビティ「NASAゲーム」を実施した。ここでは、育てるスキルを「自己理解」「他者理解」とし、活動のねらいを、「他者との相違を確認しながら、合意による集団決定の過程を体験的に学ぶこと」とした。

どの取組においても、教員が生徒の実態を共通理解し、それに基づいた取組になるように、学年全体で話し合いを行った。

Ⅲ 実践の総括

1、成果

本実践研究は、「生徒の人間関係形成力を構成する自己他者理解力とコミュニケーション能力の育成」及び、「学級集団のルールとリレーションの形成を目指す集団作り」を目的とし、よりよい人間関係づくりを進める取組を計画し、実践してきた。

朝の会の取組では、共感的な感想が出されたり、自然と拍手が出たりするなど学級が温かい雰囲気になった。また、生徒アンケートからも肯定的に捉える意見が多く出され、自己を認め、さらに他者を肯定的に捉える生徒が増加した。これらから、日常的に互いを認め合う場を設定することは、人間関係形成力の一つの力である自己他者理解力を高めることに一定程度有効であったと推察される。

宿泊研修の取組では、仲間づくりハッピーレシピを進めていくうちに生徒の笑顔が増え、意欲的に活動する場面が多く見られた。また、シェアリングの中で「最初はドキドキしたけど安心して取り組めた。」「周りの優しさを感じることが出来た。」「A君の手助けが嬉しかった。」「成功した時に何とも言えない良い気持ちになった。」など肯定的な意見が多く出された。これらから、意図的に様々な人とコミュニケーションを図り、互いに協力し合う場を設定することは、人間関係形成力の一つの力であるコミュニケーション能力を高めることに一定程度有効であったと考える。

グループエンカウターの取組では、授業

後に行った生徒へのグループエンカウターの自己評価から分析すると、授業を重ねるごとに各項目の評価が上がっている。これらから、学級の実態に応じて、計画的に人間関係づくりの授業を実践したことで、人間関係形成力が高まったと考えられる。

また、人間関係形成力が高まった生徒は周囲との関わり方を変容させていき、よりよい人間関係を築くことの大切さに気付くこともできた。

項目	5月	6月	7月
1、楽しかった	3.65	3.65	3.92
2、自分のためになった	3.42	3.66	3.89
3、自分のよいところを見つけることができた	3.42	3.56	3.77
4、友だちのよいところを見つけることができた	2.82	3.63	3.73
5、自分の考えを伝えることができた	2.91	3.68	3.78
6、友だちの考えを聞くことができた	3.42	3.80	3.90

2、課題と今後の展望

実践で明らかになった「よりよい人間関係づくりのプログラム」の課題と、今後の方向性について3点述べる。

ア 配慮を要する生徒への支援の工夫

配慮を要する生徒に対する、人間関係形成力を高めるための個別の支援を検証する必要がある。そのためには、配慮を要する生徒の実態を把握し、他者と関わることへの不安感やつまづきをなくすために、グルーピングや声かけ等を工夫して働きかけていくことが重要である。

イ 新しい指標の必要性

「日常生活の様子」「学級担任への聞き取り」「Q-U アンケートの結果」から生徒の自己他者理解力とコミュニケーション能力を把握したが、個々の生徒理解が十分ではなく個を大切にした取組には至らなかった。きめ細かな生徒理解を深めるために、人間関係形成力の各スキルを測ることができる新しい指標等も検討したい。

ウ プログラムの有効性

学校の実態に合わせてプログラムを活用することは、生徒の人間関係形成力を高めることに一定の効果は認められたが、系統的な高まりと年間を通じた高まりには至らなかった。そのため、系統的な実践、年間を通じた実践を行いながら、生徒の変容を見取り、その有用性を検証していく必要がある。

3、まとめ

阿形（2015）は、児童期・青年期の仲間関係について、依存と自立のサイクルという考え方に基づき、「児童期・青年期における安心基地の中心基地は、親でも安心毛布でも宗教的イメージでもなく、同世代の友人との人間関係であるだろう。」と述べている。複雑な人間関係、多様な個性が渦巻く学級で、「級友への肯定的な安心を得ることができる」「学級の中で自分の居場所を感じることができる」人間関係づくりの実効化をこれからも考えていきたい。また、今後さらに、人間関係形成力を高めるために、日常の全教育活動で、よりよい人間関係づくりを意識した実践を積み重ねていきたい。